プロレタリア通信 1959.4.6 NO.10
共産主義者同盟書記局

《学生運動の前進のために》
—安保改訂斗争と若干の論争問題—

共産主義者同盟書記局学対部

警職法改正でやけどした資本家階級は、今年に入ってからは、改良的指導の枠を踏み越えた激しい行動に労働者をかりたてるおそれのある、そして失いかけた小ブルの信頼をつなぎとめておくのには恰好ではない、露骨な政治的攻勢を用心ぶかくさけるという迂回作戦をもって、我々にのぞんできた。もちろん舞台裏では依然として外務官僚の手によってアメリカ帝国主義者とのあいだに安保改訂のとりひきがつづけられているのだが、それは岸のブラウン記者会見において語られたような大胆な構想—それは極東における自己の支配を維持するために、強化せる日本ブルジョアジーの力の動員を求めたアメリカ帝国主義者のNEATO構想を、自己の政治的感信の回復の道具として徹底的に利用せんと決心したものーを後面に退け、日本は不平等な条約を改正せんとしているのだという名のもとに日本の帝国主義的自立を指向した藤山試案なるものを中心にして行われているのである。既存の指導部が尚、根強いブルジョア民族主義におかされているという事情のもとで、それは小ブル大衆のあいだに疑惑を生みだし（例えば、世界四月号所載「ある奇妙な外交交渉」中野好夫）、斗いを小ブル平和主義に骨のズイまでひたり切ったカンパニア斗争の枠にとどめるのに成功しているのである。（プロレタリア通信」No.8「共産主義」第2号参照）又、最賃制をめぐる斗いも、両階級の政治的対決の胚種をあきらかにそのうちにやどしていながら、そのようなものとしては発展せしめられないままに、ブルジョアジーの昨年の末からの景気の回復が金融資本段階の蓄積様式に特有の中小企業の犠牲において実現せられたということは、その部門での労働者の戦斗力をあきらかに増大させる方向に作用していた。それらの部門における「最賃制」の要求、基幹部門での賃上げ、合理化反対斗争と結合せられ、全階級的な要求として斗われるならば、労働者階級のエネルギーは大きく解き放たれるであろうことは、景気循環の光に照らしてみても、全くあきらかなことであった。（布石が成功裡にうたれている。）

しかし、下部労働者の左翼的な気分をある程度反映した東京地評や全金属等の若干の単産の抵抗にもかゝわらず、総評の改良的幹部によって妥協への道は用意され、全労にいたっては公然と労働者階級の隊列を分裂させ、ブルジョアジーとの同盟の道を歩んだのである。ブルジョアジーの巧妙な策略と幹部の裏切りによって両階級政治的な対決が意識的に回避されているのである。ブルジョアジーの打算は、政治的には露骨な政治的攻撃を避け、総等に全力を傾注し小ブル層の獲得と改良的幹部との取引に意を用い、総等后に予定している政治的大攻勢、正面突破のための体制をともかくもうちかためることにあったのである。警職法で痛撃を創造となった后に、総等を前にして政治的攻勢の重荷をおわせることは破綻を招きかねないからである。

しかしブルジョアジーの政治的な迂回作戦が小ブル層の間で安定した気分のまんえんを可能にし、政治過程での表面には一時的な低沸がはみだされたとはいえ、その内実においては、曖昧な資本の攻勢と両階級の非和解的な斗いはやんでいないのである。改良的幹部がブルジョアジーの迂回作戦に調子を合わせ、いたずらに春斗を早く切りあげて、総等の体制に入るかということに熱中し、労働者の苦難にみちた斗いを武公主義の代償に供そうとしているあいだにも

政労、鉄鋼の斗い、なかんずく三鉱連の合理化反対斗争を中心とした政労の斗いは、先頭部における妥協の用意にもかゝわらず、階級斗争のきびしさを告げているのである。この政労の斗いを一つの契機としたから、資本家階級が投げた政治的な右回路に衝動を与え、公然たる政治的対決を排除することこそが革命的共産主義者の任務であったのである。

この様な状況の下で同盟が、その支配的な政治的影響力を及ぼしているところの学生運動を、かゝる目的に向って最大限役立たせることは、我々に課せられた無条件的な課題であった。その様な課題を果すために、三月下旬東京都学連大会、社学同全国委員会、全学連中央委員会等の一連の諸会議が招集された。これらの会議は新学期をひかえた学生大衆に安保改訂のための政治的大衆行動への結集を呼びかけその戦斗体制を作りあげることに成功したのである。そしてその成功は過去一貫して戦斗的学生運動の破壊を狙い、又その非和解的な内部斗争を通じて以外にはありえなかったのである。そこで論ぜられたいくつかの理論的問題についてはのちにへゝべるであろうが、この成功はまだ第一歩にすぎないのである。今や同盟の学生戦線内部における任務は、これらの会議が提起した方針を実現するために、それぞれの部署についてただちに行動を開始することにある。

＊　＊　＊

全学連中央委員会の最終日は、二年前に斗われた砂川斗争公判の無罪判決をもって飾られた。（三頁へつづく）

＊日本の学生運動の中で具体化しようと試みたものにちがいない。しかしその過渡的綱領が最少限綱領と最大限綱領に橋をかけたという点において（五頁に続く）

われわれは、もちろんブルジョア独裁のくびきのなかにおける公判斗争の勝利を、充足的なものとしてみることはできないであろう。田中最高裁長官のもとに裁判所内部の徹底的に反動的な体制が強化されて行く過程の中で、近い将来、法廷から去りゆく運命をもった一人の良心的な裁判官の抵抗によって、日本帝国主義者の同盟が、根本的に瓦解するなどという幻想に惑わされるわけにはいかないからである。裁判所における判決が階級斗争の結果であり、そしてその出発点であるとするならば公判によってもたらされたブルジョア独裁の亀裂を更に拡大するのは、それを意識的に利用するであろう自覚的な大衆斗争の発展のみである。ブルジョアジーはこの判決の結果に狼狽し、最高裁でとゞめをさすべく応急の措置を講じながら、いぜんとして臨戦態勢につづけているのである。みせかけの空白状態にあった政治的過程になげかけられたこの波紋は、大衆斗争の組織によってのみその振巾が拡大されうる。学生運動においては、公判の結果を徹底的に利用しつゝ、安保改訂をただちに中止せよとの要求をもって対政府斗争を組織することによって大衆運動の端緒を切り開かねばならぬであろう。東京においては、四月一五日、首相官邸に対する戦斗的なデモンストレーションがすでに計画され、実行にうつされようとしている。しかも選挙というブルジョア独裁の代式はおきまりの試合主義による大衆斗争の麻痺的環境への可能性をはらみながらも、一方ではホブル大衆をも広汎な政治的覚醒の状態へと導いているのである。われわれは、かかる条件とブルジョアジーに対して中立を要求するという幻想によってではなく、ブルジョア独裁の直接性たる岸政府打倒のスローガンを大衆の中にもちこみ、攻勢的な反政府斗争を展開するために利用するであろう。そしてわれわれの支配的な影響下にある学生大衆の徹底的な動員を通じてまだ改良的指導下にある労働大衆にも働きかけ、見せかけの政治的安定を突破する糸口をつかみとるために斗うであろう。

＊　＊　＊

又、三月下旬に開かれた一連の諸会議においては、学生運動の転枠やその労働運動との連関等についておおくの言葉がついやされた。のちにその多くがわが同盟に結集するに至った ——→

革命的学生の手によって、五六年再建された学生運動は、学生戦線という限られた分野ではあったが、豊富な斗いの経験を運動と理論のなかに血肉化していったのである。その再建は、学生大衆の前に大胆に政治的課題をあきらかにし、大衆的行動に組織するという前衛的任務を放棄した圧倒主（それを）義との徹底的な内部斗争を通じて始めて可能とせられたものであったが、それは一九五〇年の反帝斗争の伝統をうけついだ「平和擁護斗争の第一義的任務」なるテーゼをかゝげ、平和運動を善しつづけていた既存の指導部の民族主義、小ブル平和主義に対して、運動の基礎に国際主義的性格と階級的立場への立脚の必要性を強調したかぎりにおいて、それは、新しい転換への胎動を用意したのであったが、平和共存戦略と世界革命戦略との中間的立場からの脱出は、一九五七年後半から始まる壮大な転換を待たねばならなかったのである。「平和擁護斗争第一義論」の固定化から生じた十一・一国際統一行動デー以後の運動の手詰りの実践的探索と　日本共産党内部の革命論争に端を発し、長きにわたって国際共産主義運動を善しつづけて来た平和共存戦略の根拠にあるソヴェトの過渡期社会の歪曲的現象を洞察するに至った理論的前進によって学生運動の指導部の革命的成長は用意せられていったのである。そしてそれらの指導部に課せられた実践的課題は、小ブル大衆としての学生の根本的な解放は、全世界的な規模でのプロレタリアートの解放によってのみ可能であるとの立場にたって、その運動を意識的に労働者階級の斗争の利益に結びつけ、その発展のために学生運動をみちびいていくことにあった。それは当然平和共存戦略を絶対化し、国際プロレタリアートの解放を不確定のままにおいやるとの結果を招いている小ブル平和主義や、学生大衆の民主主義的要求それ自体自己目的化した日和見主義との内部斗争を通じてなされなければならなかった。

又一方では運動の生長に伴ってあらわれる左翼空論主義ー左翼的空論のみをとってあそび、指導部の転換と学生大衆の転換とを混同し、自らの影響下に来ていない大衆をも正しい統一戦線戦術の適用によって斗いに引き入れカクトクするという任務を忘れたものとの斗争をも必要としたのである。（プロレタリア通信No.3、4参照）五八年に於ける勤評警職法斗争における学生運動の大衆的革命化を実践的内容として、全学連オ12回大会はそれらの理論的定式化を行ったのである。この転換を妨害し、運動の革命化にブレーキをかけようとした代々木共産党は、徹底的に粉砕され、学生戦線内部における大衆的影響力を失うに至った。「三月都学連事件」を豪語した彼らはわずか一割ていどのグループに転落し、宮本書記長自らに激励された全学連中央委員会グループは僅か一票の中間票もカクトクすることなしに破れた。

学生な経験主義と民族主義に骨の髄まで侵された所感派に代って、主導権をにぎった構造的改良派でさえも、この豊富な斗いを経験した大衆的信頼をつなぎとめることはできなかったのである。我々は四五月斗争の過程で、彼らを完膚なきまでに破砕し、学生戦線内部での彼らの影響力の根絶のためにたたかわねばならない。いまだにして公けには共産主義運動の指導部として考えられている彼らをこの戦線から放逐することに成功したならば巨大な官僚的機構を支える基幹的幹部及びスターリン主義イデオローグの補給源をたちきることになるだろう。しかし学生大衆の信頼を失ったスターリン主義者に代って新たに装いをもった日和見主義的潮流が形成されつゝあることにも我々は注意を払わねばならないだろう。パブロ、ジェルマンの政治方針に忠実な国際共産党の影響下にある人々がそれである。

彼らは主義はその独特の学生運動論から出発する。彼等は学生が社会的特殊身分である社会層から一般的にはプロレタリアートの見習い期間に属する社会層としての性格を与えたが故に、学生にプロレタリアートの予備軍」としての本質的規定を附与せねばならぬという。この規定から彼らは、学生運動のプロレタリア的性格を強調するのであるが、このような論理が結局は、構造的改良派のとなえる「反独占斗争」ー小ブル層の反独占斗争における意義を強調することによって、その実はプロレタリアートの斗いを小ブルの水準にまで引きさげるーと同じく日和見主義への転落を用意する前提となるのである。

今日の学生運動は革命的プロレタリアートの指導下にあるホブルインテリゲンチャの運動としての性格を失うものではない。彼らは大ブルジョアジーの露骨な攻勢の前に自らの政治的権利の剥奪をおそれ、或はブルジョア社会の矛盾に対する知的認識を持つことによって、政治的斗争に参加するのであり、その運動を前衛が意識的に定式化し革命的に燃えたたせるのである。資本主義がすでに内在的生命力を持たなくなり、ホブル大衆がたゞ、プロレタリアートの予備軍としておとされることは無条件的に、彼らにプロレタリアートの予備軍としての本質的規定を与えるものではない。資本主義的矛盾の激化の下で憤怒に燃えた小ブルが金融独占ブルジョアジーの組織化のもとにファシズム運動を展開しプロレタリアートに対する白色軍に転化することさえあるのは、二十世紀の階級斗争が何回か経験したのであった。しかし同時に我々は意識的前衛の指導下にあるホブルジョア運動としての学生運動があるときには階級斗争の鶏鳴的役割を果すとはいえ、その方向を根本的に規定するのはあくまでもプロレタリアートの本隊である。もし我々がまだ労働者階級の多数をカクトクしていないという現実の中でプロレタリアートの斗争を学生運動によって代表的に代置しようとするならばそれは一方ではプロレタリアートのヘゲモニーの過少評価をもたらし他方では学生運動にセクト的な傾向を持ちこむことになるであろうという事を意識せねばならぬ。

さて、このような規定のうえにたって彼らは自治会を「学生大衆の文化的、経済的、政治的権利の保障と拡大のための斗争組織とならねばならぬ」と規定したのち、中立政策、日中合同経済政策プラン、教育綱領等の大衆的斗争による追求が、いまだ政治的に未熟な大衆をして支配階級との苛烈な斗争に入りこませその中で彼等の要求の実現の保証をブルジョアジーの政府の打倒としての外大衆に実践的に意識させ得る「過渡的綱領」となりうるであろうという。もちろんこれは一九三八年の第四インター結成大会において採択され、今日においても、その綱領として認められている「過渡的綱領」を

（三頁下に続く）

革命的意義を認められているというまさにその点に我々の批判は向けられねばならぬのである。なぜならば、ドイツのプロレタリアートに権力の問題がまさに焦眉の急務として課せられていた一九二九～三三年のドイツの階級闘争においては、独ソの計画経済の提起は権力に近づく一つの過渡的綱領として具体的有意義をもちえたであろうし、あるいは一九一七年四月のソヴェトがまだメンシェヴィキ、エスエルの支配下にあるとはいえ、それが大衆の気分を反映しており、しかもさらにそれを左におしやる十分な主体的、客観的条件が存在するかぎりにおいて「ソヴェトに権力を！」との要求によって、改良主義者の本質を暴くことは必要であったろう。しかし、一九一七年、あるいは一九二九～三三年という革命的昂揚の条件の中で語られたこの過渡的要求を世界党の綱領として固定化した所には、改良主義への転落を生みだすものとなるのである。

一九五八年のフランスの階級闘争の中での第四インターフランス支部の「社共統一戦線政府」の政策、セイロンのランカサマサマジャ党の权力の提起を伴わない国有化の要求等はその典型であり、又、トロツキスト同志会（国際主義共産党）による「国民会議に責任をもつ社会党政府」「中立化政策」「日中合同計画経済」「炭鉱の無償国有化」等の一連の政策もその「過渡的綱領」の具体化に他ならないのである。彼等はこのようにして最小限綱領と最大限綱領に橋わたしをすると称して、革命的激動の中でとられた戦術を平時の職制にも適用することによって、改良主義への転落を証明しているのである。その結果、民主主義と社会主義との橋わたしをするという同じような試みをもって出発したトリアッティ主義者の「社共政府」「中立化政策」「日中国交回復」「国家独占による社会主義への漸次的移行」との本質的な同一性に近到達し、ついにはトリアッティの讃美者に近行きついてしまったのである。（「情勢と方針」参照）しかも、これは組織戦術における無視による Pressure Group への転落とうらはらの関係にあることはいう迄もない。しかし、彼等は労働者国家の強化と植民地革命の進展とによって資本主義は長期的衰退の時期にはいったのだと強弁する。たしかに資本主義はその階梯の最後をのぼりつめているにちがいない。しかし、いかなる危機が存在しても、資本主義は自動的に崩壊しない。死の床についた資本主義に引導を手渡すべきプロレタリアートの一撃が必要なのである。そしてそのためには、その手をおさえつづけできた公認の共産主義運動指導部との非和解的な斗いを通じて結成されるべきプロレタリア前衛の媒介が不可欠であろう。又、資本主義がその没落期に入ったということは、景気循環の光に照らされた階級闘争の昂揚、沈滞の波の存在を否定するものではないのである。トロツキーが第四インターの結成を準備した一九二九～一九三八年はあきらかに資本主義の永続的危機の徴候を示していた。しかしそれは一九二九年の大恐慌を転換とした資本主義の新たな世界史的段階への推移に伴うものであった。すなわち株式制度によって社会的資本を集中した金融独占資本が資本市場によって自律的に規制をうけつつ巨債を長期する金融独占資本段階に代って、固定資本の巨大化は、国家的資金の補完と国家的諸操作によって蓄積を行う国家的独占資本主義への推移を要請していたのである。日本は一九三一年の産業調整法を契機に、又、アメリカはニューディールの採用によって国家資本主義への移行を始めた。それらの国では激しい階級闘争は圧殺されなかった。ドイツでは大恐慌を経済の自立的運動によって切りぬけようとした ヒルファーディングの経済政策は破綻し、資本主義の危機的状況がファシズムの登場をまつ迄つづくのである。フランスにおいては人民戦線のレッセフェールによって国家資本主義への移行は三十年代後半に迄持ちこされ、その間階級闘争の永続的沸騰化の状態がつづくのである。このような時代にトロツキーはその世界党の綱領を权力への過渡的方策を定式化した「過渡的綱領」としてかきあげたのであった。

しかし、それは資本主義が国家独占段階へ移行し、一九四九年中国プロレタリアートによって加えられた打撃を最後に比較的安定した支配を残余のプロレタリアートに対して経験もつつ、あるときに当

然、書きなおされるべきものとなっているのである。例えば賃銀スライド制の要求はたえがたいまでのインフレ期においては革命的要求になりえても、平時においてはむしろ賃銀奴隷制をいんぺいする役割を果すものとなるのである。それを「アメリカにおいて賃銀スライド制が採用されているのは過渡的綱領の正当性を示すものである」と第四インターが公然とプロレタリアートに向って語るときにそれは彼らの改良主義的本質を証明する材料以外の何物でもない。これは資本主義に対する第四インターナショナルの平板な、無媒介的な認識に根ざしているのであるが、それは同時に彼らの安保改訂斗争の平板な認識の根拠である。彼らは日本帝国主義の自律的な運動の結果としてその政策を分析することをせず（プロレタリア通信 No.8）もっぱら体制的視点からの反革命軍事体制分業論に満足しているのである。そしてそれに対置される 政策はソヴェトの無条件ヨーゴと反革命軍事体制打破という、つきつめていけば体制間矛盾論にしか行きつかないものである。今日のソヴェトの過渡期社会としての歪曲的現実（共産主義第二号）は世界革命の挫折という事実が生みだしたのであって、その矛盾の止揚（第四インターにおいては自足的な第二次補足革命と呼ばれるもの）は残存する国際ブルジョアジーの打倒を通じてのみ可能であると強調する。したがって世界革命に優先するソヴェトの無条件ヨーゴは我々の戦略的課題ではありえないし、我々の本質的な任務は残存する帝国主義者の打倒であり、その道こそが十月革命の真のヨーゴ者であると主張するのである。ソヴェトの無条件ヨーゴを戦略目標にかかげないのが赤色帝国主義論者であり、十日革命の名称者であるというのは、平板な頭脳の持主にのみ許された暴言である。

我々は、過去の一定の時期においては、自覚的な革命的立場にありながら、今日においては公認の共産主義運動部との理論的政治的愛着の方向を客観的にはだどることによって、学生戦線内部でのあきらかに分裂者としての役割を担いつつある 国際主義共産党の諸君が、その階級的自覚を再び踏みかためる事を期待するものである。（終）